

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	肥満と新型コロナウイルス感染症 二つのパンデミック
別タイトル	Obesity and COVID19
作成者（著者）	龍野, 一郎
公開者	東邦大学医学会
発行日	2022.06.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 69(2). p.71 71.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2021_060
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD09823674

肥満と新型コロナ感染症—二つのパンデミック—

龍野 一郎

千葉県立保健医療大学長

2020年の初頭から広がった新型コロナ感染症 COVID-19の大流行は社会に大きな衝撃と爪痕を残し続けています。新たな変異株の出現など人知を超えて動く自然の脅威には文明の進んだ現在でさえ、驚かされます。諸行無常、生者必滅、地球の王と君臨している人類も盛者必衰、私たちは独りよがりにならず、常に己を見つめなおし、ウイルスとの戦いでも共生社会を考えなければならないでしょう。

新型コロナ感染症との戦いの中で糖尿病といった病気や喫煙のような生活習慣がその重症化と結びついていることもわかってきました。中でも、肥満が大きなりスクであることが、報告されています。肥満は体格指数 (body mass index: BMI, 体重 (kg) / 身長 (m)²) が日本では 25 以上、欧米では 30 以上で定義されていますが、ヨーロッパの報告では肥満があると ICU への入室が 4.96 倍も多くて、BMI が 35 以上の高度肥満では亡くなる確率が 12.1 倍も高いと言われています。この機序として、肥満に伴う内臓脂肪の増加が横隔膜を圧迫して呼吸機能を低下させることや内臓脂肪から作られて慢性の炎症を起こし、糖代謝を悪化させている TNF α などのサイトカインが肺で新型コロナウイルスの侵入経路となっている ACE2 蛋白の発現を増加させることなどの関与が考えられています。

肥満とは医学的には摂取エネルギーが消費エネルギーを超えて余剰エネルギーが体内で脂肪として過剰にたまる状態です。特に内臓脂肪型肥満は糖尿病・脂質異常症・高血圧・冠動脈硬化など生活習慣病の原因となることが知られています。肥満の原因は過食と運動不足に行き着きますが、その背景には車社会の進展、宅配便の普及などにみられるような運動をしないでも済む社会の実現、商業主義におおられた美食・大食の氾濫による食物の過剰摂取の存在があります。核家族化や食の欧米化は日本人の食行動に大きな影響を及ぼし、家族内で培われてきた日本人の伝統的食文化を失わせ、嗜好に依存する孤食の機会を増やしました。この結果、特に若い世代の栄養・運動を含めた不適切な生

活習慣が男性で肥満者の増加、女性では極端なダイエットによる若年女性の痩せに繋がっていることは皮肉な現象と思われれます。

近年、肥満や糖尿病患者に対するステイグマ (偏見・決めつけ) の問題がクローズアップされています。例えば、肥満ステイグマには太った人に対する「意志が弱く、怠惰で、愚かだ」という偏見、「超太った」「痩せない」という会話 (ファット・トークと言われる) から、職場、教育現場、医療機関でのいじめや嘲笑、差別まであらゆるタイプのもので存在しています。肥満者はこれまで十分に減量に対して努力してきたにもかかわらず、複雑な原因から減量できず、その過程で挫折し、このような中傷・偏見から心が傷つき、自分を守るために耳を閉ざしている人も少なくありません。肥満ステイグマは重大な問題でもあり、我々は常に肥満者の傍らに立って、これらのステイグマを打ち消し、ともに進むアドボカシー (支援) 活動が必要と思います。

肥満の治療には食事療法、運動療法、認知行動療法に加えて、難治例には抗肥満薬を用いる薬物療法、最近では肥満外科療法がおこなわれています。肥満外科手術は美容目的の皮下脂肪の吸引手術ではなく、胃を細くしたり、胃と腸を繋ぎ変えたりする消化器外科手術の一つです。当初、肥満外科手術は高度肥満患者に対して食物の摂取や消化吸収の制限を目的として施行され、減量手術と呼ばれてきましたが、近年、糖尿病に対して減量効果を超える優れた改善作用を認め、減量・代謝改善手術、糖尿病外科手術とも呼ばれるようになってきました。ただ、減量・代謝改善手術は医師にまかせて手術をすれば治るといった人まかせの治療法ではなく、患者自身が治療に積極的に参加し、外科医だけでなく、内科医・精神科医・看護師・管理栄養士・薬剤師等の多職種とともに実施される生涯に亘る栄養・運動・認知行動・薬物治療を含めた総合的な治療であることを強調したいと思います。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2021-060